

黒田勝弘氏による「週刊朝鮮」への寄稿：仮題「ノーベル賞の産室・京都大学の秘密」

過去、韓国人科学者でノーベル賞受賞の可能性があった人物が二人いる。いずれも半世紀以上も前のことだが、一人は李升基博士(1905-96年)でもう一人は李泰圭博士(1902-92年)だ。奇しくもこの二人とも京都大学出身の科学者だった。

今年のノーベル医学生理学賞に日本人の山中伸弥・京都大学教授が選ばれたことから、韓国では京都大学に関心が集まっている。そして「韓国人はなぜまだなのか？」と焦燥感も聞かれる。

日本人のノーベル賞受賞者はこれまで計19人だが、文学賞や平和賞を除く科学分野は16人で、そのうち受賞第一号の湯川秀樹博士をはじめ8人が京都大学関係者である(京都大学発表)。日本でも「京都大学はノーベル賞の産室」といわれてきた。なぜ東京大学でなくて京都大学なのか。その秘密は何か？京都大学とは？

筆者は科学者ではないが、京都大学出身(経済学部卒)の新聞記者として(韓国式に言えば60学番だが)京都大学とノーベル賞の”秘密“を紹介しようと思う。

ところで冒頭に引用した二人の韓国人科学者はいずれも日帝時代に京都大学で学び、解放後は韓国科学界の指導者になった。李升基博士はソウル大の初代工学部長になっているが、朝鮮戦争の際、北に渡り、北朝鮮で最高の科学者になった。

彼は化学合成繊維「ビナロン」の開発者として知られる。北朝鮮には今なお「2・8ビナロン連合企業所」という大規模な化学工業団地が咸南にある。彼はまた、寧辺原子力研究所の初代所長になり多くの核科学者を育てた。北における「核開発の父」という声があるほどだ。

「ビナロン」とは一九三九年、日本の京都大学で開発された「ビニロン」と同じものだ。歴史的には米国でのナイロン開発に次ぐ世界で2番目の化学合成繊維だった。李博士は京都大学留学中、化学科の桜田一郎教授らと共同でビニロン開発に成功した。

「ビニロン」は李博士とともに北朝鮮に渡って「ビナロン」という名前になった。北朝鮮はそれを「自主開発」だとして、いわゆる“主体科学”のシンボルに祭りあげた。

桜田教授はノーベル化学賞の有力候補といわれたが、第二次世界大戦および日本敗戦などの事情で受賞の機会はこなかった。李升基博士も事情は同じだった。

一方、李泰圭博士も李升基博士と同世代である。解放後、ソウル大の初代理工学部長を務めた。1920年代に京都大学に留学し、韓国人として初めて日本で博士(理学博士)になった。1938年、京都大学からさらに米プリンストン大学に留学した後、京都大学教授になった。彼は日本での韓国人教授第一号だった。

李泰圭博士の専攻は「量子化学」で、解放後の韓国から再び米国に渡りユタ大学の化学科教授になった。ユタ大の同僚教授とともに発案した量子(理論物理)に関する「Lee-Eyring理論」で知られた国際派の学者だった。1973年、永久帰国し1992年亡くなった。その間、ノーベル化学賞候補に正式に名前が上げられたことがある。

二人はいずれも京都大学工学部化学科の出身になるが、この化学科からはその後、二人のノーベル化学賞の受賞者が出ている。福井謙一教授(1981年)と野依良治教授(2001年)である。京都大学の化学研究の伝統を物語るものだ。

ノーベル化学賞では2002年、民間企業の40歳代のサラリーマン研究者、田中耕一氏が受賞し話題になった。彼は古くから京都にある医療機器メーカー「島津製作所」に勤務していた。京都大学出身ではなかったが、彼の受賞も「京都が生んだノーベル賞」ということができるかもしれない。

ところで「数学のノーベル賞」といわれる国際学術賞に「フィールズ賞」というのがある。ノーベル賞に数学賞がないため、1930年代にカナダの数学者チャールズ・フィールズによって創設された。国際数学者会議が4年ごとに受賞者を発表する。

これをすでに日本人3人が受賞しているが、そのうち2人が京都大学出身者である。

余談だが「フィールズ賞」については面白いエピソードがある。話はとたんに韓国大統領選の安哲秀候補のことになる。

筆者（黒田）は安候補のことを知るため彼の『安哲秀の考え』を読んだ。自分の人生を語った部分以外はさして面白くない退屈な本だったが、最後の章の「未来の主人公たちに」に面白い話が出ていた。

本の中で引用された唯一の日本人の話で、フィールズ賞受賞者の数学者、ヒロナカ・ヘイスケ(広中平祐)の著書『学問の楽しみ』が紹介されている。安哲秀氏はその本の一節を自分の生活信条にしているとして「本には一人の平凡な人間が努力の末に、もともと天才だった人間よりもっと輝かしい業績を残すことができるといった話が書かれている」という。そして「いかなる問題にぶつかっても自分は事前に人より2、3倍もっと投資する覚悟でやる。それこそが平凡な頭脳を持った自分がやることのできる唯一の方法だ」という文章を読んだ時、自分の将来の道を照らす光を発見したような感動を受けたという。

広中平祐氏は京都大学出身の受賞者の一人で今も京都大学名誉教授である。

実はこの夏、京都大学の松本紘総長がセミナーでソウルを訪れた。韓国訪問を機に日韓双方の同窓会で共同して総長歓迎の昼食会を催した。筆者はソウル在住日本人の同窓会長をしているため、歓迎のあいさつをした。その際、冒頭で紹介した李升基、李泰圭博士のことを語った。

というのも最近、京都大学には韓国から優秀な学生や研究者がなかなか留学してこないという不満や悩みを松本総長から聞いていたからだ。そこで筆者は「京都大学のOBにはこんな立派な韓国人学者がいた」という歴史を韓国に向けにもっとPRしてはどうかと勧めたのだ。

松本総長自身、京都大学と李升基博士や李泰圭博士の歴史を知らなかった。韓国の若い世代にもほとんど知られていない。しかしノーベル賞受賞の背景として、どこの大学にもまして「自由の気風」と開かれた雰囲気を持つ京都大学のPRのためには、そうした韓国人OBたちは絶好の存在なのだ。

ちなみに松本総長は工学部出身で専攻は宇宙工学である。彼の研究は「宇宙太陽発電所」の実現というもので、宇宙で太陽エネルギーを発電に変え地球に届けるといった壮大な構想だ。無限で究極のクリーンエネルギーということになるが、こうした奇想天外な発想もまた京大的といえるかもしれない。

海外から多くの優秀な研究者や学生を迎え、さらなる国際化を目指す京都大学にとって、韓国は不満の対象になっている。「ノーベル賞の京都大学なのになぜもっと来てくれないのか」と。

この背景には韓国人の日本に対する誤解というか、理解不足がある。それは何かというと、日本は韓国のように何でも一極集中ではないということだ。日本文化は実は東西の二極に分かれていて、その全体のかたちは楕円型と考えれば分かりやすい。日本理解にはこれが不可欠だ。

しかし韓国人は自らの国や文化構造がきわめて中央集権的で、すべてがソウル中心であるため、日本についても同じだと誤解している。だから日本留学についても東京志向が強く、京都など地方には目が向かないのだ。

大学でいえば、韓国では国立ソウル大学の次は私立の延世・高麗というのが上位ランクだが、日本の場合、東京大学の次は京都大学が国立大学として存在する。韓国の延・高に相当する慶応・早稲田はその下になる。

ここで重要なことは、ナンバー2の京都大学は首都の東京ではなく地方の京都に存在することだ。しかもその地方は東京より文化的には先進地域だった。

東京は東日本に位置するが、西日本に位置する京都は歴史的には文化先進地域である。日本文化は中国や朝鮮半島に近い西からしだいに東に広がっていったからだ。

とくに西の京都には千年以上にわたって天皇が存在することで日本の中心だった。「権力」

は東に存在しても「権威」は西に存在し続けた。

近代化の過程で権力（政府）も権威（天皇）も東の東京に存在するようになったが、これは日本文化としては異例であり、正常ではない。京都に市民の間では天皇家に対し「京都への帰還」を訴える声は今もある。

つまり日本には東京大学と京都大学に象徴されるように、文化的に二つの中心があるのだ。それが東西に分かれ、お互いいつも競争し刺激し合い、負けないように鍛え合ってきた。その際、重要なことは必ずしも相手を打倒し一人で一番になる必要はない。必ず二番がいて、一番と共にお互いがその存在と価値を認め合うという構造だ。

伝統スポーツの相撲を見ればよく分かる。相撲はいつも東西に分かれて戦う。しかも東西それぞれにトップランクの横綱がいる。東の方が格は上だが、その時々で成績で入れ替わる。

伝統芸能の落語も東と西に分かれ、その笑いの味に違いがある。そもそも料理の味が東西では違う。西は淡白な薄味だが、東は味も色も濃い。プロ野球でも東のジャイアンツと西のタイガースが、昔から最大ライバルとして競い合ってきた。

だから日本文化は必ずしも一番にならなくてもいい、いや一番が2人いてもいいという構造なのだ。価値が二分され両者並立、東西両立の楕円型文化なのだ。

京都大学は明らかに東京大学と対抗、競争関係にある。ランクでいえば東京大学の方が上に位置する。創立時期も東京大学の方が早い。

それだけに京都大学は東京大学にはない独自性をいつも追究してきた。独自性で自己主張し、それが結果的にノーベル賞にもつながったのだ。

たとえば東京大学は何とんでも国家経営に必要な「国家有用の人材」の育成が最大目的だった。したがって今でもその出身者には官僚や官僚経験を土台にした政治家が多い。国家の基幹（あるいは権力機関）を担う人材を主に育成してきたのが東京大学だった。

ここで面白いエピソードを紹介する。国家機関の中で権力の中核といってもいい検察に、昔から意外に京都大学出身者が多いのだ。理由が興味深い。

日本では検察は正義社会の砦として、高級官僚や政治家などの権力犯罪取締りが最大課題だった。ところが官僚や政治家には東京大学卒が多い。彼らを取り締まるには東京大学卒ではやれない。そこで京都大学出身が検察に多く起用されたというのだ。

若干の誇張はあるようだが、東京大学に対する京都大学のイメージをよく物語るエピソードである。

京都大学は国家や権力を意識した東京大学に比べ、卒業生の多くは民間を目指し、また研究者を目指した。京都大学には14の研究所があるが、これは日本の大学の中では最も多い。

“東西二元主義”ともいうべき楕円型文化構造の日本で、京都大学は“西の中心”として自負心と自尊心は強い。しかし国の中心は今や東の東京である。とくに政治、経済はそうだ。この現実客観的事実として否定できない。そしてこの現実の中心的担い手は東京大学というのも間違いない。

しかし国の中心、政治や経済の中心から離れていることによって、国立大学ながら京都大学には「余裕と自由」が生まれた。短期的、現実的な国家の要請からは距離を置くことで自由と独自性が保障された。時間的余裕のなかで自由な発想や基礎研究に没頭することができた。

「自由な発想と基礎研究」はノーベル賞とくに科学分野での受賞には不可欠である。

京都大学には何年間も論文一本書かず研究を続ける研究者がいる。それを許容する雰囲気があるのだ。それほど個人の独自性が尊重されている。

だから一時の失敗や落伍も許される。失敗を繰り返しても追放されない。努力と成功に向け時間を与えてくれる。

今回、ノーベル医学生理学賞を受賞した山中教授は若いころ失敗が多かったので「ジャマ

ナカ」と揶揄されたという。

「ジャマ」とは「妨害」とか「支障」「障害物」といった意味だから、「ジャマナカ」とは失敗が多くて「妨害になる山中」「障害物のような山中」というわけだ。失敗を恐れない努力、これもノーベル賞の背景だ。安哲秀氏が感動したという広中平祐氏の言葉もそれを語っている。

筆者は1960年に京都大学に入学した。理科系ではなく文科系の経済学部だったが、まず強調されたのは「自由と自律」だった。「京都大学は自由である。何をしてもいい。好きなことをしろ。すべてキミたちの判断に任せる。ただ、その責任はキミたちが取れ」と。講義室では出欠を取らなかった。講義への出席は自由だった。したがって大きな講義室に学生は数人ということもよくあった。教授は何も言わなかった。講義には出ず試験だけを受ける学生も多かった。筆者もその一人だった。

当時は日本は政治の季節だった。学生運動が活発で反政府・反米デモが全盛時代だった。筆者も講義にはほとんど出ず、デモと読書と映画に没頭した。読書だけは一カ月で何十冊と目標を設定し、下宿であらゆるジャンルの本を乱読した。

筆者は経済学より文化的分野に関心が強かったが、それでも経済学部を卒業できた、いや卒業させてくれた。「自由と自律」は今も筆者の好きな言葉である。

京都大学のノーベル賞の背景には京都という都市の影響も大きい。

人口は現在、東京（特別区）は約850万人だが京都は約150万人にすぎない。しかも京都は山にかこまれた盆地型で、都市空間は東京に比べはるかに狭い。日本で最も多くの文化遺産が残る歴史的文化都市であり学術都市になっている。

しかし観光都市ではあるが政治や経済は関係ない。つまり学者や研究者にとっては京都は、余計なものが存在しないため、研究にだけ専念すればいいところなのだ。都市空間が狭いため、研究者たちはお互い接触機会が多い。そこには異なる分野との対話を含め多くの討論が自然に生まれる。

京都大学には当然、右翼も左翼も存在する。筆者の学生時代は左翼中心の反政府・反米学生運動が活発だったが、一方では日本を代表する憲法学者が右派の憲法改正論を堂々と主張していた。排除されることはなかった。左右がお互いその存在を許容し合っている。

京都はまた学生を大事にする都市である。筆者の経験でいえば、京都では学生は市民から「学生さん」と呼ばれていた。韓国式に言えば「学生ニム」である。京都では学生とともに研究者はいつも期待と尊敬の対象だった。

京都は研究者にとってきわめて自由であると同時に集中度の高い空間だ。この「自由と許容と集中」もまたノーベル賞的研究には必要な条件である。

私が京都大学で学んだことも「自由な発想と独自性」だった。

私は30年間、韓国で記者生活をしてきた。昨年、古希（満70歳）を迎えたが、これは韓半島専門記者としてはきわめて異例の”この道一筋“だ。こうした経歴は日本のジャーナリズムでは明らかに独自性である。

さらに私は近年、日韓の歴史問題において韓国人の公式的な歴史観とは異なる歴史認識を主張することがある。そのため時には妄言だと批判を受け、ネット世界では“妄言製造機”などという揶揄まで出ている。日本のジャーナリズムの主流である朝日新聞の報道とは異なることも多い。これもまた「自由な発想」の産物である。

山中教授がノーベル賞を受賞した際、朝日新聞は社説でノーベル賞の秘訣について次のように書いている。

「多様な個性を生かす場所があり、常識を逸脱したテーマが出てもどこか可能性があれば評価してやる機会を与える。そんな懐の大きい人と場所があつてこそ独創的な発見も生まれる」

京都という都市と京都大学にはそのような人と場所が存在するところである。私もその恩恵を受けた者の一人である。*